とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

lapaid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

【Ｎコード】
Ｎ５０１９Ｙ

【作者名】
ｌａｐａｉｄ

【あらすじ】
ある日私は真っ白い空間にいました。そこには自称神と名乗る人物が。
話を聞けば転生させてくれるそうです。何でも神様のミスだとか。
所謂テンプレってやつですかね？
希望を聞いてもらって、向かう世界は「魔法先生ネギま！」だそうです。まあ、魔法やらなんやらで危険ではありますが、楽しめそうではありますね。

目が覚めると…えっ？なにこの設定？いや、悪いとは言いませんけど…ハァ…

初投稿です。アンチ、チート、原作改編、自己流解釈など結構やらかしてますので気を付けて下さい。

第一話（前書き）

初投稿です。
拙い文章ですがお楽しみ頂ければ…

第一話

「知らない天井ですね。」

取り敢えずいってみたかったこの台詞。
周りを見回しますが真っ白です。何もありません。距離感がおかしくなりそうです。

「というか、何故こんなところにいるのでしょう？」

それに、もう一人が居ないのです。

「すまんのう…ここは何処でも無い場所じゃ。」

いきなり「いかにも」な方が現れました。
驚きましたよ。

「その通り。儂は神じゃ。」

「ＧＯＤの神ですか？なんにせよ説明を頂きたいのですが。」

「ここは本来死ぬべきではない人物の来る場所じゃ。」

「本来死ぬべきではないとは？」

「儂は名前こそ無いが最高神での。部下がミスをして本来寿命でない人がここに来るのじゃ。」

「役所が個人を管理していた書類をシュレッダーにかけて再起不能

になったって感じですか？」

「そんな感じじゃの。というかお主の言った出来事のままじゃが。」

うわぁ……でもなんか……うわぁ……

「そこは申し訳ない。さて、ここに来た人物は主に三通りの選択肢があるぞい。」

「三通りですか。」

「うむ。

1つ目はこのまま天国に行くことじゃ。普通の輪廻に交じるということじゃ。

2つ目はここで仕事をする。下級神となって、人の管理をする。もっとも、ワーカホリック位しか選ばんがの。

そして3つ目、二次元の世界に転生することじゃ。」

「では3つ目で。」

「早いのう…まあどれを選ぶも個人の自由じゃからの。いく世界は決まっておるが良いかの？これは決めた後にしか伝えられんのじゃが。」

「ええ。3つ目でお願いします。」

「ふむ…行く世界は『魔法先生ネギま！』じゃ。お主の記憶を見たが、この世界を知っておるようじゃの。

それで、じゃ。行くに当たって希望したいことはあるかの？3つまでなら聞くぞい？」

３つかぁ…慎重に選ばないとなぁ…

「おっと、先に言うておくが、気や魔力は最初は平均より高めじゃ。特訓すればしただけ伸びるようになっておるぞ。あとは不老じゃ。２０歳からの不老じゃの。」

意外とありがたいサービスがついていた！

とするとまずは…

「東方ｐｒｏｊｅｃｔの八雲紫の能力、『境界を操る程度の能力』をもらえますか？」

「ほう…なかなか良いのを選んだのう…それに見合うだけの演算能力もつけよう。」

これはありがたい。

「では…『魔法先生ネギま！』の世界の魔法や気の知識を頂けますか？」

「知識だけだと使用はできんのじゃが、良いかの？」

「それは特訓すればいいんでしょう？」

「その通りじゃ。使用出来る状態からスタートも出来るんじゃが、それでも良いかの？」

「ええ。構いません。自分で特訓するのが好きなので。３つ目ですが、原作の大戦に関われるようにしてもらえますか？」

「なるほど…了解じゃ。もう一人はちゃんといるから安心してもよいぞ。」

ここには居ないですけど…

「向こうに着いたらわかるぞい。」

「そうですか。」

心を読まれたのはサラッと流す。

「ではお主を送るからの。ゆっくりと世界を楽しんで来るがよい。」

神の言葉を最後に、私は意識が落ちた。

第二話～麻帆良武道会～

こんにちは。転生した「私」です。
確かに大戦に関われるようにしてもらえますか？と言いましたよ。
言いましたとも。

ですが

「ここが麻帆良か～すげえな！強いやつと戦えるぜ！」

横にいるコイツ、誰だと思います？

そうですよ。ナギ・スプリングフィールドですよ。

「戦いたいのは分かったから。エントリーしに行きますよ。」
「そうだったな！んでユキ、何処か分かるか？」
「ガイドブック読めばわかるでしょうに…向こうですね。それっぽい人もいますし。」

私の名前はユキ・スプリングフィールド。ナギの双子の姉として生まれました。
ちなみに転生したというのが分かったのは5歳の時、それから『境界を操る程度の能力』が使えるようになりました。

で、私は１０歳で魔法学校を卒業、旅に出て行方をくらませようかとしたらナギが中退してついてきました。
あ、卒業後の課題はなかったですよ？あの仕組みは大方大戦後に出来たんでしょう。

行方をくらませようかとした理由は単純で、能力を手に入れたのをごまかそうかと思ったんです。
どうせしばらくしたらゲートポートに行って魔法世界に行くんでその時にでもやりますが。

ドンッ！

「あ、すみません…」

考え事をしていたのでぶつかってしまいました。見上げると若い青年です。大きな野太刀を背負っていますが。

「こちらこそすまなかった。考え事をしていたもので。」
「お！お前強そうだな！武道会に参加するのか？」
「ああ、そのつもりさ。君たちはどうするんだい？」
「私たちも参加するつもりです。貴方とは当たりたくないですね。中々の手練れのようなので。」
「はは。そう言ってもらえると嬉しいね。」
「俺は戦ってみたいぜ！お前、名前はなんだ？俺はナギ・スプリングフィールドだ！」
「私はユキ・スプリングフィールドです。」
「俺は青山詠春さ。それじゃ、健闘を祈るよ。」

そのまま軽く礼をして歩いて行きました。
詠春でしたか…まだ近衛では無かったんですね。

そのまま歩いて行き、エントリーしました。ちなみに私が参加すると言ったときの参加者名簿をつけている人の驚き方は凄かったですね。まあ、見た目はただの女の子ですからね。

さて…大会が始まりました。予選はバトロワ形式でした。一言で言わせてもらうと
「雑魚ばっかり」
でした。見た目で人を判断してはいけません、ということを思い知らせましたよ。

んで、本戦です…が、結論から言います。私とナギ、詠春意外は雑魚でした。
私は『戦いの歌』で身体強化、そのまま肉弾戦に持ち込んで勝ちましたよ。準決勝の相手も軽くいなして、次が決勝戦です。
さて、ナギ対詠春ですね…しっかり見ておきましょうか。

ナギはフットワークをいかして詠春の懐に潜ろうとします。が、詠春は野太刀を振るって追い払い、そのまま神鳴流を決めようとします。あれは…斬空閃でしたか？
あ、ナギが障壁で防ぎました。やっと防御を覚えましたか。
そんなやりとりがしばらく続きましたが、二人とも動きが止まりました。時間が押してるからお互いに威力の高い技で決めるつもりですかね…

台詞が無いですって？結構離れてるから声が聞こえないんですよ。
解説はもはや機能してないですし。どういうことか？いや「すごい」だの「派手」だのしかいってないのですよ。

おや？ナギはあんちょこ見てますね。読唇術で…何々？「ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサトー！」って…
なんの事か分からない？日本語にします。「百重千重と重なりて、走れよ稲妻！」ですよ。

ナギは「千の雷」、詠春は「雷光剣」、２つがぶつかって煙が上がります。

ゆっくりと煙が晴れていきます。立っているのは…ナギでしたか。審判が１０カウントとって、ナギの決勝進出が決まりました。

ナギが控室に戻ってきました。

「どーだ…勝って…やったぜ…」

息も切れ切れに話してきました。

「お疲れ様です。まあ良いじゃないですか。派手に壊したおかげで決勝は１時間後ですよ。」

「１時間あればなんとかなるぜ…絶対に勝ってやるからな！」

「私も負けるつもりは無いですよ？」

今はゆっくりと過ごしましょう。

「さあいよいよ麻帆良武道会も決勝戦！いままでハイレベルな戦いを見てきましたが、ここで終わるのが惜しいくらいです！さあ、決勝戦の選手を紹介しましょう！先ずは一人目、ユキ・スプリングフィールド選手です！」

私がリングに上ると歓声が上がります。

「いまだ１０歳の女の子ながら、敵を瞬殺する実力は本物です！ま

ともな試合を見ていない気がしますが、この試合ではどうなるでしょうか！
では二人目です！ナギ・スプリングフィールド選手です！」
ナギがリングに上ると、同じように歓声が上がります。
「こちらも１０歳の少年ですが、先程は素晴らしい試合を見せてくれました！それまでの相手はほぼ瞬殺、やはり実力は本物です！そして、この二人は双子なのです！双子同士の戦いのどちらに軍配が上がるのか！」
「本気でいきますよ？」
「当然だ！俺が倒して優勝するぜ！」
「威勢は良いですね。私も優勝を狙うので。」
「それでは、試合…開始！」

「「『戦いの歌』！」」
お互いに無詠唱での戦いの歌、一気に距離を詰めます。
拳を出して、受け流され、ナギが掌底。それは読んでますよ。
そのまま手首を掴み、放り投げます。
放り投げたところまで一気に瞬動、回し蹴りで叩き落とします。
「グッ！」
ナギは背中から叩きつけられましたが、身体強化もあってそこまでダメージは無さそうです。そのまま立ち上がりました。
「マンマンテロテロ…」

「！リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…」
呪文詠唱は予想外でした…すぐに始動キーを唱えます。

「来たれ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐！」
「来たれ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の氷雪！」

「『雷の暴風』！」
「『闇の吹雪』！」

ドオン！

「くっ…！『魔法の射手　連弾　光の１０矢　水の１０矢』！」

爆風で吹き飛ばされながらも、魔法の射手で反撃。雷の暴風は打ち消しきれなかったですからね…！

「うお！？お返しだ！『魔法の射手　連弾　雷の２０矢』！」

ナギも黙ってやられるわけもなく、打ち返して来ました。最初の１、２発当たっただけ良しとしましょう。

チラッと残り時間を見ますが、もう２分もありません。ナギに目配せすると、すぐに理解してくれました。

「マンマンテロテロ…契約により、我に従え高殿の王、来たれ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆」
「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…契約により、我に従え炎の覇王、来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄」

「百重千重と重なりて、走れよ稲妻！」
「罪ありし者を死の塵に！」

「『千の雷』！」
「『燃える天空』！」

ドッゴオオオオオオオオオオオン！

轟音と共に、凄まじい爆発が起こりました。
急いで障壁を張り、衝撃と爆風を防ぎます。

「タイムアーップ！」

煙が晴れていきます。ナギは…立っていました。

「な、なんと！両者とも無事です！今回の優勝者は二人！ユキ・スプリングフィールド選手とナギ・スプリングフィールド選手です！」

「ちぇー…引き分けかぁ…」
「全くです…ま、負けなかったですけどね？」
「納得はできないけど、仕方ねえな。」

第三話～ご都合主義～

ＳＩＤＥユキ

どうも、ユキ・スプリングフィールドです。

えー…只今トルコのイスタンブール、魔法世界へのゲートポートです。

武道会が終わって、ナギと詠春が意気投合、その流れで『魔法世界に行こう！』って成りました。

まもなく準備が完了するはずですが……お？

巨大な魔法陣が現れました。いよいよ転送ですかね？…って私だけ別に魔法陣！？どういうこと！？

考えを巡らせるまもなく転移されました。

ガサッ

痛たた…えーっとここは森？何故に？Ｗｈｙ？

混乱していると、ヒラヒラと一枚紙が落ちてきました。手にとってみます。

『どうじゃ？ネギまの世界を満喫しとるかの？といってもまだ大戦すら始まって無いんじゃがのう。

今回はちょっとしたサービスじゃ。お主は『境界を操る程度の能力』の練習がまるで出来んかったじゃろう？そこでナギや詠春とは別に転移させてもらったぞい。

ただこれだけだとサービスにも何にもなっておらんじゃろうから、ダイオラマ魔法球を送っとくぞい。なんと外の１時間が中での１年になると言うものじゃ。

さらにお主が認めぬ限りは見ることも触れることも出来ん特別製じゃ！

もちろん中の環境は整えてあるぞ？食料は１０年分はあるからの。職業は適当に探してくれの。

なお、この手紙は読み終えたら自動的に消滅するぞい。』

そのまま手紙は存在が薄くなり、消えてしまった。

ドサッ

目の前に落ちてきましたよ。魔法球。手のひらサイズ。

えーっと、状況を整理すると…

・ナギたちと別行動に

・魔法球（特別製）ＧＥＴ！

・職業は自分で探せ

ってことですか…

（……い……おい！）

「ふぇっ！？」

いきなり声が聞こえました。なんなんでしょう…

（俺がわからねえのか？お前のいう「もう一人」だよ！）

（あ…あなたでしたか…びっくりしたんですよ？）

（何が「あなたでしたか」だよ…ったく、すっかり俺のこと忘れやがって…）

（いや、気にならなかったというか何というか…）

（正直に言えよ…忘れてたんだろ？いい加減俺も表にでるぞ？）

（わかりましたよ…暴れないでくださいね？）

（わーかってるよそのくらい。）

「ふぅ…久しぶりに表に出たぜ…」

（しょうがないでしょう…あなたが表に出る機会が無かったんですから…）

「お？こんなところに女のガキがいるぜ！」

「いいじゃねぇか！身ぐるみ剥いて慰み物にしてやろうぜ！」

（ちょうどその機会がやって来たぜ）

（程ほどにしてくださいよ…）

ん？俺が誰か、だって？まあ後で説明するから待っててくれ。

数は…5人。野盗の類か？

「だーれが好んで慰み物になるか。さっさと滅べ。『凍てつく氷柩』！」

パキン！

氷付け…だが3人か。無詠唱なら上出来か？

「「なっ…」」

おーおー唖然としてやがる。まさか１０歳のガキがこんな呪文使えるとは思ってなかったか？

俺は浮遊術を使って空中に飛び上がる。が、アイツらはポカーンとしてやがる。逆に腹がたつな。

「追ってこれねぇとは情けねぇなぁ！ま、お前らはここで死ぬ運命さ！

俺の名前は零崎雪織！てめえらのきく最後の人間の名だ！」

（リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ　おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ）

頭の中で詠唱、このくらいは容易いもんだ。

「『冥府の石柱』！」

ドッ…ガガガガガ！

巨大な６角形の石柱が空洞を開けるように６本、閉じ込められたところにトドメの１本。そのまま下衆どもを押し潰した。ってゆーか

抵抗無しかよ。まあ抵抗してもどうにでもなったがな。

一分待ったけど反応なし、こりゃ死んだな。

「ハッ…ちょろいな。」

（え、えー……）

さてと、適当に暴れて気分も晴れたから説明しようか。

俺とユキは同一人物で別人格。平たく言えば二重人格だ。

転生前、ユキは性同一性障害だった。その結果イジメを受けた。

何度もイジメを受けているうちに、ユキは女としての人格を生み出して、それが主人格になったんだ。今思えばどんなレアケースだって話だな。

んで、俺は半ば封じ込められたんだが、元々の人格は俺だ。何度も呼び掛けると、ユキの精神と繋がった。

始めは会話が出来るのがやっとだったが、その内に表に出る人格を操作出来るようになった、って訳だ。

んで何だかんだで転生したんだが、ユキが俺のことをすっかり忘れてやがったから表に出るのが遅れた、って感じだな。

以上、説明終了！

（まあ…もう良いですよ。それにしても零崎名乗るってどうなんですか？）

（別に良いだろうが。まさに裏人格って感じで。）

（ハァ…）

なんか溜め息ばっかだな。ま、原因は俺だけどな。

さてと、これからどうすっかな…

第四話～キングクリムゾン！～（前書き）

ここでもご都合主義が発動

第四話～キングクリムゾン！～

ＳＩＤＥユキ
「さあて…殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

（どうも…只今裏人格のユキ・スプリングフィールドです。
あ、大戦が始まったので私は「泉野雪」と名乗っています。）

ズドォン！

（あれから魔法球の中で西洋魔法の修行を5年程。おかげで大抵の魔法は無詠唱で使えるようになりました。）

ガガガガガッ！

（その後は日本で神鳴流の修行。門外不出の『弐の太刀』も教えてもらいました。
どうやったのかですって？運が良かっただけなんですが。）

ピキ…パキ…

（何やら妖怪退治に失敗したのか今にも殺されそうになっていた子

供を助けたところ、青山家の一員だったんです。取り敢えず保護して本山に向かいました。）

バリィィィイン！

（長に「なにか出来ることはないか？」と言われ、「神鳴流を教わりたい」と言うとＯＫが貰えたのです。約１年程で修めました。それから再び魔法球にこもって、５年程咸卦法の修行をしました。居合い拳もつかえますよ？）

「あーあ。零崎終了か。」

（只今の職業は主に依頼されて賞金首を狩ってます。エヴァ以外。主に雪織が。）

「さて、報告に行きますか。」

（あ、そうそう。雪織は魔法…スキマも応用して姿を変えています。髪や目の色は黒色に、んでもって黒いローブを羽織ってます。）

「スキマは…別にいいか。歩いていくか。」

（ちなみに得物は黒い鎌。これは魔法球レベルの金がかかってます。魔力や気やらを最も流しやすい金属で出来た特別製。同じように刀も作りました。）

「ただもう少し歯応えのあるやつでも良かったかな。」

（得物が鎌だから雪織は「漆黒の死神」なんて呼ばれてます。私ですか？私は特には何もしてないので二つ名なんかありませんよ。）

「そんな感じで俺たちは過ごしてる、って訳だ。」

（台詞とらないで下さいよ…まあ山程喋ったので後は雪織に任せます。）

んで、さっきの戦闘だが…『雷の暴風』、『魔法の射手　連弾　光の１０１矢』、『おわるせかい』の３つだ。

実は『おわるせかい』は二段構えなんだぜ？

「とこしえのやみ、えいえんのひょうが」までで凍結、そのあとに砕くまでが１つの魔法だ。『こおるせかい』の場合は永久凍結するまでが１つの魔法、ってことだ。

っと、説明している間に到着だ。

「依頼完了だ。」

「ふむ…これは報酬の５０００ドラクマじゃ。それにしても見事な戦いぶりじゃったな。」

俺は取り残した場合金を一切受け取らない、絶対に後金にする、という二つの条件でいつも依頼を受けている。

依頼料は本来の手配金額の５割。希望すれば遺体現場につれていくことや、生け捕りも可にしている。その場合は手配金額の６割で依頼を受けている。

ちなみに指名手配されていない場合は依頼人に金額を決めてもらっている。

そのおかげか信用度はかなり高い。今回は依頼人が遠見の魔法が得意だったらしく、１から観察していたようだ。

「そりゃどーも。次があったら依頼してくれ。もっとも、いないかもしれんがな。」

俺は魔法世界を放浪している。理由はスキマ移動のためだ。

スキマ移動は一度見たことがある場合とない場合とで大きく難易度が変わる。

見たことがない場合は正確に座標を決める必要があるので、洞窟内等には開けないのだ。

適当に移動していると、新聞の記事が目に入った。「次の戦闘は『紅き翼』の参加か！？」だと。

ちょうどいいか。あの愚弟（ナギ）の顔と『紅き翼』の実力を見に行くかな。

第五話～ＶＳ『紅き翼』～

ＳＩＤＥナギ

よう！ナギ・スプリングフィールドだ！

俺は今、『紅き翼』って名前のギルド？で戦争で活躍している魔法使いだ！

メンバーは俺、旧世界からついてきてる詠春、途中で仲間になったアルビレオ・イマに俺の師匠をしているゼクトの４人だ！

アルは「重力魔法」が使えるし、ゼクトは見た目はガキだけどすげぇ強い！

で、今は何をしてるかっつーと、帝国側が撤退したら急に強い魔力を感じたから、そこに向かってる途中だ。

いままでで一番強く感じたから気になってるんだ。

「む…？」

お師匠がなんか気づいたみたいだ。俺も目をこらすと、なんか黒っぽい人間が見える。

近づいた途端、そいつは口を開いた。

「てめえらが『紅き翼』か？」

女みたいな声だな。

「ああそうだぜ。お前は何なんだ？」

「俺が何者か、ねえ。そこの白いローブを着た男、アルビレオ・イマ。気づいているんじゃねえか？」

「ええ…私の推測が正しければ。『漆黒の死神』、零崎雪織でしょうか？」

「なんじゃと！あの賞金首を狩っているという奴か！？」

「大正解だ。今回は帝国側からの依頼でな。「『紅き翼』の実力を見てこい」とのことだ。おっと、殺しは無し、って話だったがな。」

『漆黒の死神』って聞いたことねぇけどなぁ…

「じゃあお前は強いのか？」

「さあね。今回の目的はてめえらの実力を見ること。1対1がいいか、1対多がいいか、選べ。」

随分上から目線で腹が立つな。

「おっと、逃げるのは無しだぜ『サムライマスター』青山詠春。もし背中を見せたら…」

いない！？

「こいつは御陀仏だ。」

声の聞こえた方を向くと、アルの首に大鎌が添えてあった。できる

なコイツ…

「さて、どうする？」

「いいぜ。１対１でやってやろうじゃねえか。」

「ふぅん…じゃ、順番は俺が決める。アルビレオ・イマ、青山詠春、ゼクト、ナギ・スプリングフィールドの順だ。途中で手出しするなよ？」

「仕方あるまい…いったん離れるぞ。」

お師匠と詠春、俺は二人から離れる。するとアイツもアルから離れた。

「ヒヤヒヤしましたよ…死ぬかと思いました。」

「俺は殺すなとは言われたが、根本が達成できそうにないなら手段は選ばん。精々あがけよ？『魔法の射手　連弾　闇の１０１矢』」

ＳＩＤＥユキ

一気に魔法の射手が向かう。

「はっ！」

黒い球体…重力球か。まああれくらいなら普通に落とせるよな。

んでもって俺の方に飛ばしてきた。

「あらよっと」

ま、俺も使えるんだがな。重力球にたいして重力球をぶつけてかき消す。

そのまま虚空瞬動で懐に入る。

「『闇の吹雪』」

お？障壁はったか。とはいえほぼゼロ距離攻撃は効いたみたいだ。フラフラしてるし俺を見失ったか。

「『魔法の射手　戒めの風矢』」

「くっ…！」

命中、束縛成功。後は降参させるだけ。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…”おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ”」

掌は上に向けて

「『冥府の石柱』っと…どうだ？降参か？」

「…無理ですね。降参です。」

ま、今の間に首を刈れば人生が終わってたからな。当然と言えば当然か。

「まずは一勝。次だ。」

すべての魔法を解除。次にやって来たのは詠春。

「俺は殺さないが、おまえらは殺す気で来ていいんだぜ？」

影のゲートを利用して刀を取り出す。

「先手は譲ってやる。来な。」

「なら遠慮なく行くぞ。神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

バカでかい気の雷が落ちる。が、結界で防ぐ。ってか一回打って動き止めたら無意味だろ。

「どうした？この程度か？」

無傷だし、挑発してやる。

「ならば！神鳴流奥義！斬魔剣　弐の太刀！！」

「神鳴流奥義。斬魔剣　弐の太刀」

弐の太刀は弐の太刀をぶつけることで相殺が出来る。

「なっ！？」

ま、どういう技か知ってるから防ぐことも出来るけどね。

縮地で詠春の真後ろに移動。

「考え事する暇があるのか？神鳴流奥義　斬岩剣　弐の太刀」

おもいっきり横薙ぎに振る。わざとだが。
それをなんとか避けて、詠春が斬りかかってきた。防ぐようにして、
そのまま鍔迫り合いに。

「何故貴様が神鳴流を使える…！」

「自分で考えな。っと！」
わざと力を緩め、体制が崩れたところで鳩尾に掌底。

「グフッ！」
「神鳴流奥義　雷鳴剣」

吹っ飛んだところに雷鳴剣、そのまま直撃。これより威力あげたら
死ぬからな。
一気に移動して詠春を掴み、アルに向かって放り投げる。

「軽度の全身火傷。適当に治療しとけ。次」

ゼクトか…戦法は無詠唱の中火力魔法の連発だったか？

「お主は出来るようじゃからの…油断はせんぞ！」

「おっと！」

いきなり飛んできたのは熱線。『燃える天空』　かよ。
かと思えば次構えてるし。

「『雷の暴風』！」
「『闇の吹雪』！」

相殺、爆煙が上がるが正直なところ油断は出来ない。というわけで

「『冥府の石柱』！」

ところ構わず石柱投擲。さて…

「む…『最強防護』！」

当たり。声が聞こえれば位置は分かる。一気に瞬動で後ろに移動。

「…『障壁突破　雷の斧』」

「な…ぐっ！」

もろに命中。まあ死なない程度に威力は調節してある。

（『斬魔剣　弐の太刀』だったら死んでますしね。）

（なにしてたんだ？今の今まで黙って。）

（ちょっとした精神統一ですよ。）

「『魔法の射手　戒めの風矢』」

んで拘束。そのまま鎌を突き付ける。

「これにて終了、か？」

「じゃの…手も足もでんわい。」

というかこの状況から反撃出来る人がいたら見てみたいもんだ。

（その前にあなたは首を落としてるでしょう？）

（まあな。）

「さて…最後。ナギ・スプリングフィールド。てめえだ。」

「はっ…今までの仇、返してやるぜ！」

「出来るんならやってみな。」

「行くぜ！『雷の暴風』！」

結界を張って受け止める。

つーか術式適当だな…バカみたいな魔力で強引に発動してるだけだろ？

（ムラがかなりありますしね。この際実力差をはっきりさせてはどうですか？）

（だな。）

影のゲートでナギの真後ろに転移。

「ねえ。」

「なん…ブヘッ！」

ただ単に殴っただけです。あ、雪ですよ？ゲートの時に入れ替わりました。

「あなたが打てる中で一番威力が高い技を打ってください。相殺してあげます。」

「な！いったなてめぇ！やってやろうじゃねーか！」

ブツブツと唱えてます。『千の雷』以外あり得ないわけですが。

「行くぜ！『千の雷』！！」

「『雷の暴風』」

普通なら『雷の暴風』はかき消され、『千の雷』が私に直撃します。が、

「なっ！？」

魔法陣見て威力が薄くなるところを計算して打ちました。結果、相殺してお互いの魔法が消えました。

今度は瞬動で移動、刀を首に突きつけます。

「弱い。」

「くっ…」

かくして、『紅き翼』との戦闘は私と雪織の勝利に終わりました。

さて、事情を説明しますかね……

第五話～ＶＳ『紅き翼』～（後書き）

戦闘です…が正直上手く書けません…
なにかアドバイスがあればお願いします！

それからアンケートです。
今は大戦期なわけですが、そのうち原作本編に入ります。そこで、麻帆良でのユキの立場をアンケートしたいと思います。
１　教師
２　女子寮管理人
３　喫茶店などの店主
以上の３つから選んで下さい。
一人一票でお願いします。
期限はユキが麻帆良につくまで！結構時間はあります。

第六話～ＴＨＥ・説明～（前書き）

アンケート実施中です！
ユキの麻帆良での立場について。
１　教師
２　女子寮管理人
３　喫茶店などの店主
以上の三つから選んでください！

第六話～ＴＨＥ・説明～

ＳＩＤＥユキ

「ま、実力も分かったことですし。ネタばらしとしましょうか。」

「は？」

私はフードを外し、長い髪を外に出す。ナギと同じ、赤毛の髪。

「な…な……な……」

呆然として声が出てませんね。当然と言えばそうですが。

「さて、ナギ・スプリングフィールド。私は誰でしょう？」

「ユキ…なのか…？」

まるであり得ない物を見たかのような表情。

「ええ、その通り。私はユキ・スプリングフィールド。あなたの双子の姉ですよ。」

「グスッ…良かった…もう5年以上も経って…戦争が始まって…ズズッ…ずっと会えねえのかと思って…」

あらあら…泣き出しましたか。

「ご免なさい。辛かったでしょう？だから良いのよ？強がらなくて。

」

ふんわりと優しく抱き締める。

「だから今はお姉ちゃんに甘えて？大丈夫。顔は見えないから。」

「う…ぁぁあああ！」

～数十分後、『紅き翼』基地にて～

「さて…説明してもらえますか？」

そう切り出したのはアルビレオ・イマ。

ちなみにナギは隅っこで膝を抱えています。恥ずかしかったんでしょうね。

「ええ。私はユキ・スプリングフィールド。先ほどの会話通り、ナギの双子の姉です。」

「では、ナギが『会えない』と言ったのは何故でしょうか？」

「5、6年ほど前に、ゲートポート関連の事故がありませんでしたか？」

「いえ、そのような話は聞いたことありませんが…」

「とすると揉み消されたのでしょうか…私はナギ、詠春と一緒に魔法世界を回るつもりでした。」

「つもり、とは？」

「何が起こったのかは分かりませんが、私は転移の際、全く知らない森に飛ばされました。」

このあたりから嘘ばっかりになりますが。正直仕方ありません。

「とは言えここは魔法世界のどこかだろう、そう思って散策していると誰かは忘れましたが、賞金首に会いました。

襲われそうになったので私は反撃しました。幸い私の実力を見誤ったソイツを無力化することが出来ました。

で、どうしようかと考えているとどこからともなく人がやって来ました。説明を聞いて、ソイツが賞金首であることを知りました。

お陰で私は身に余るほどの大金を手に入れましたが、さすがに持ち運びが大変です。というわけで大半を使って２４倍ダイオラマ魔法球につぎ込みました。」

「なんというか…無茶苦茶ですね。」

「まったくですね。自分でも信じられない位です。まあ、かなりの金額があまりましたが、生きるためには働いて金を稼ぐことが必要です。

とはいっても１０歳の体ではほとんどなにも出来ません。というかさせてもらえません。そこでかなりの年数魔法球に閉じ籠りました。」

「食料はどうしたんじゃ？」

「最初に大量にお金を払ったのでなんとかなりました。で、魔法球の中ではひたすら魔法研究に取り組みました。

そしてある日のことですが、研究中の魔法を暴発させてしまいました。その結果としてですが、もう一人の私である雪織が生まれ、不老になり、さらにはこんなことが出来るようになりました。」

「うおっ！？」

スキマで詠春の前に手首から先だけ出してみました。予想以上の驚きっぷりですね。

「魔力などは一切感じんかったが、空間操作かの？」

「いや、これだけ見るとそうですが。詠春、水の入った容器はありますか？」

「なんに使うのかは知らんが…ほら。」

キャッチして弄ってリリース。

「熱っ！？」

「概念操作とでも言いますか。言うならば『境界を操る程度の能力』が手に入りました。」

「チートですか…ところで何故『程度』とつけているのですか？」

「出来る範囲が限られてるみたいですし。後は気分です。」

まあチート以外の何物でもないですけどね。

「そうですか。」

「で、雪織が賞金首狩りを始めたんです。姿は私と区別をつけるために髪と目の色を黒色にしてますが。」

「では俺からだが。何故神鳴流を使えるんだ？それも弐の太刀まで。」

「あー…『泉野雪』って知ってますか？」

「うん？いつぞやに連絡があったな。1年で神鳴流を修めたとか。」

「それ、私です。」

「なんだと！？」

「簡単に言うと暇潰しで京都に来てた時に青山家の人を助けた見返りとして教わりました。」

「そ、そうか…それで弐の太刀まで使えるのか…」

どこか納得いかない様子の詠春。ですが事実なので諦めて下さい。

「お主の力では何が出来るのかの？」

「『境界』に関係する事象があれば大抵のことは出来ます。というか何が出来て何が出来ないかは正確に把握してませんし。」

屁理屈でもいいから境界を作れば弄れますし。死者蘇生と時間操作は出来ませんでしたが。

「んでユキは『紅き翼』に入るのか？」

お、ナギ復活。

「ええ、入りましょうか。」

こうして私は『紅き翼』に参加することになりました。

その後皆に私は『ユキ・スプリングフィールド』と名乗らず、『泉野雪』として名乗ることや雪織の性格や事情等を説明しました。

本名を言わない理由は「なんか嫌な予感がするから」とだけ言いました。まあ雪織が日本名なのもありますしね。

さて、戦争に介入していきますか。

第七話～グレート＝ブリッジ奪還作戦～（前書き）

アンケート実施中です。
ユキの麻帆良での立場について。
1　教師
2　女子寮管理人
3　喫茶店などの店主
以上の三つから選んでください！

第七話～グレート＝ブリッジ奪還作戦～

ＳＩＤＥユキ

「は？グレート＝ブリッジが落とされた？」

「ええ、そうなんです。」

どうも、泉野雪です。

私が『紅き翼』に参加してはや数ヶ月、あれから新たにジャック・ラカンが仲間になりました。

そして過ごしてきたところにこの一報。原作知識がなければ唖然とする以外にできそうにありませんでした。

アレの守りの固さは見ただけで分かるほどでしたから。

「一体何があったんですか？アレが落とされるなんてそうそう考えられませんが。」

「大規模転移魔法による不意討ちだそうじゃ。それで指揮系統が狂ったんじゃろうの。」

「で、その手紙はつまり私たちにグレート＝ブリッジを奪還せよ、ってことが言いたいわけですね？」

「まさしくその通りです。」

「よっしゃあ！さっさといってちゃっちゃと奪還だ！」

「おう！俺様も存分に暴れてやるぜ！」

「バカ二人は黙って下さい。作戦も無しに行くとか愚の骨頂でしょうが。
アレの強みはブリッジを攻めれば上空から、上空を攻めればブリッジから攻撃できることですよね？」

「構造を見た限りではそうだろうな。とすると二手に別れるのが良いか？」

「ん～そうでしょうね。上空担当とブリッジ担当に別けて攻略するのが良いでしょう。」

「では上空担当はラカンと雪がやるのが良いでしょうか？」

「妥当な線ですね。ラカンとナギを合わせたら化学反応起こして暴走しそうですし。ナギ、ゼクト、詠春、アルが４人で内部を攻略する、ということですね。」

「上空担当のお主ら二人がいかに上手くやるかじゃの。」

「その辺は任せて下さい。ハエ一匹たりとも逃さないようにして戦って見せましょう。」

「そーら、斬艦剣！」

いやはや。さすがラカンです。馬鹿デカイ剣を振り回して次々と戦艦を落としていきます。

私はブリッジと上空を完全に分断するように結界を張って攻撃をしています。ちなみに雪織はお休みです。

「『冥府の石柱』！『闇の吹雪』！」

私は戦艦に乗らずに突撃しようとするやつを中級~上級魔法で撃ち落としています。結界を維持する必要があるので、さすがに広域殲滅魔法は使えません。

「『紅き焔』！『雷の暴風』！」

つーかさっさと撤退して欲しいですね。若しくはナギたちが早く奪還してもらいたいです。

「ははっ！さすがユキだな！じゃんじゃん無詠唱で唱えてやがる！」

「黙って下さいラカン！結界を維持するのは辛いんですよ！」

『ユキ！グレート＝ブリッジの奪還は成功だ！今からそっちにいくぜ！』

『ちょっ！待ちなｓ「ブツッ」…』

念話で成功報告の確認は良いんですが、こっちに来る必要は無いんですけどね…

「まあいいです！ラカン！適当に離れなさいよ！」

結界を解除して、呪文詠唱開始。

「”契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝”！」

「あ、ヤベ！」

「『無幻の光槍』！」

カッ！ズガガガガガ！！！

光系の広域殲滅魔法、無数の巨大な光の槍が降り注ぐ魔法です。『おわるせかい』等とは違い、確実性はほんの少し下がりますが威力は遥かに上回ります。

「ふい～危なかったぜ。」

「離れろといったでしょうに。」

「聞こえなかったんだぜ？お前の声が。」

「そうですか。まあ貴方なら大丈夫だと思いましたし。」

あ、帝国軍が引いていきます。さすがにアレで壊滅的なダメージを受けましたからね。

「いや、さすがに俺様でもお前の詠唱つきのアレは食らったら死ねるぜ？」

「おーいユキー！って終わってるじゃねぇか！」

そしてナギ登場。ゼクト、アル、詠春も一緒です。

「勝手に念話を切るからです。来る必要は無いと伝えようとしたんですがね。」

「まったくのう…少しは落ち着きを覚えろ馬鹿弟子が。」

グレート＝ブリッジの奪還後、私は『属性を統べる者（エレメンタルマスター）』という二つ名がつきました。色んな属性魔法を打ってたからでしょうか？

後、ファンクラブが出来たそうです。以外と女性のファンが多いそうで…憧れでしょうか？

ただ、うわべだけを見るのは止めて欲しいですね。結局のところは人殺しですから…

第七話～グレート＝ブリッジ奪還作戦～（後書き）

～オリジナル魔法～

『無幻の光槍』

詠唱

”契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝”『無幻の光槍』

説明

光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

他の広域殲滅魔法と比べ、確実性はわずかに落ちるが、威力は他をはるかに上回る。

”降り注げよ”を”向かい射て”にすることで自身の回りから射つようにすることが出来る。

第八話～『完全なる世界』、そして反逆者に～（前書き）

アンケート実施中です。
ユキの麻帆良での立場について
１　教師
２　女子寮管理人
３　喫茶店などの店主
以上の３つから選んで下さい。

第八話～『完全なる世界』、そして反逆者に～

ＳＩＤＥユキ
泉野雪です。
グレート＝ブリッジを奪還して早数ヶ月、辺境に飛ばされたりなんだりするのは分かってましたんで皆に事情を説明、雪織に本来の職業である賞金首狩りをさせてました

時々帰って来てみるといつのまにかガトウとタカミチ君が仲間になってました。
取り敢えず自己紹介で『漆黒の死神』でもあることに驚かれました。

それから咸卦法と居合い拳使ったらまた驚かれました。ガトウは「まさか女性でやる人がいるとは…」、タカミチ君は「凄いです！」、他の人は「まあユキだからな。」という反応。

なんか最後の反応はムカつきましたよ。腹いせにラカンとナギをボコボコにしてやりました。二人から勝負を挑まれたんですよ？間違っても私からは手を出してません。

さて、そんなこんなでガトウから連絡があって、本国の首都に来ています。

「んで、協力者って誰なんだ？」

そこに歩いてくる男性…もとい

「マクゲル元老院議員！」

煩いですよ詠春。大声出さないで下さい。そもそも…

「いや、ワシちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

前後の口調の差がひどいですね。ま、それはともかく。階段を上ってくるのは一人の女性。

「ウェスペルタティア王国…アリカ王女だ。」

美人ですね。いやはや。んで、横にいるナギを見るとボーっとしてます。アレですね。一目惚れってやつでしょう。

一人一人自己紹介。そしてラカンは「気安く話しかけるな、下衆が。」と言われました。

さて、私の番です。

「お初にお目にかかりますアリカ王女殿下。私は泉野雪と申します。」

「おお…そなたが『属性を統べる者』か。」

「そう呼ばれてはいますが、所詮は一人の人間です。どうぞ宜しくお願いします。」

会合が終わり、暇な時間です。が、

「ワッハハハハ！　上手い事やりやがってこんガキャァ！」

「あぁ！？　なんの話だよ！！」

「とぼけんじゃねーよ！　あのお姫様とイチャイチャキャイキャイお喋りしてたろーが！この色男が！」

「なにがイチャイチャだ、バカっ！　してねっつの！！」

「何言ってんだよ。俺なんか『気安く話しかける　な、下衆が』だぜ～～～？　いやーありゃイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？　マゾかあんた？俺ぁあんなおっかねぇ女、はじめて見たぞ？」

喧しい二人ですこと。ホントに。

「しかしよ、ウェスペルタティアの王女ってこた　ーアレか？　例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや、姫子ちゃんの事はなんか、話しにくいみ　たいだった」

「へぇ？　なんでだよ？」

「知るかよ。俺だって気になってんだっつーの」

成長阻害や感情阻害の薬浸けにして自分の家族を兵器として利用してるんですから。辛いはずが無いです。

ま、これについては黙っておきますが。

「今は協力を取り付けただけ良しとしましょう。それよりもこの戦争が伸ばされているように感じる理由です。」

「誰かによって世界が滅ぼされようとしている、というアレですか。」

「荒唐無稽な話では無いからな。俺たちも調べてはいるが…」

「少し私は色々な場所を見て回って来ます。あなたたちは別に調べてみて下さい。」

「了解だ。」

馬鹿二人はさっきまでのは何だったのか、また言い合いをしています。ヤレヤレですね。

よう、零崎雪織だ。

俺というイレギュラーのせいか、『完全なる世界』が見つかるのが遅れてしまった。ナギとアリカのデートが今日で、すでに出掛けてしまったようなのが残念なところだ。

「『完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）』？」

「ああ。その組織がこの戦争を長引かせている存在だ。奴等も馬鹿じゃ無いのか、ヘラスやらアリアドネーやら、『紅き翼』では到底行けない場所でようやく尻尾を掴めたぜ。」

「俺たちも帝国と連合がどこかで繋がっているという情報は入ったが…」

「ん、上々だ。どうやら中枢にまで奴等は入り込んでいるようだ。ガトウとタカミチはその方面から調べてみてくれ。それから…重大なのはこれだ。」

俺が取り出したのは一枚のレポート。そこには一枚の男の写真と、『完全なる世界』との結び付きを調べあげた文章。

「おいおい、コイツは今の執政官じゃねえか！ＭＭのナンバー２まで奴等の手が入ってんのか！？」

「ソースは確かだが、確実な証拠が無い。周りには話すなよ？」

そしてナギがデートから帰ってきました。

今はクドクドと詠春が説教してます、が手元に一枚の紙を発見。

「ちょっと落ち着いて下さい詠春。ナギ、その紙は何ですか？」

「ん？これか？なんかアジトを荒らしてたら見つけたんだが…」

「ちょっと見せて！」

写りだす立体映像、そして語られる内容。まさに

「ビンゴ…！でかした！」

「え？何がだ？」

「後で説明します！コイツがあれば戦争は一気に終わらせれます！」

しかし私は焦り過ぎて、１つやることを忘れてしまっていました。

ガトウがマクゲル議員に連絡して、弾劾裁判の準備を進めることになりました。

そして法務員とマクゲル議員に会いに来たわけですが…

「法務員はまだいらっしゃらないのですか？」

「法務員は…来られぬことになった。」

「は？」

ミスった！本物のマクゲル議員を保護するのを忘れていた！

「あれから少し考えたのだがね…折角の勝ち戦だ…ここに来て水を指すのも…どうかと思ってね」

「はあ…」

「私の考えでは無い。そう考える者が多いと」

「黙れ」

居合い抜きで躊躇わず首を狙う…が、手応えなし。幻影か…

「ちょっ…ユキ！お前何してるんだ！？」

「やられました…ナギは気づきましたか？」

「ああ。お前マクゲル議員じゃねえな。何もんだ？」

「気付かれたか…」

服が破れ、白髪の青年が姿を現す。

「なっ！？」

「よくわかったね、千の呪文の男に属性を統べる者。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要だね。」

トランシーバーを取りだそうとしたのを狙おうとしたが

「ぐぅ！」

どこから…？影のゲートか？

「わしだ！マクゲルだ！『紅き翼』から暗殺されそうになった！奴等は帝国のスパイだ！ああ、うむ！奴等の仲間もだ！今も狙われている！軍に連絡を…」

やられた。みればもう一人がラカンとナギの相手をしている。

「君達にはここで退場してもらうよ。」

「本体は既に海の中、か…」

スキマを展開して強引に味方を全員基地に送る。

「覚えてなさい『1番目(プリーム)』。私たちの誰かが潰してあげるわ…」

驚いたような顔を見てから、私もスキマで逃げる。

それから程なくして、『紅き翼』には反逆者のレッテルが張られました。もっとも、

「昨日までの英雄が一転、反逆者か。ヌッフフ、人生は波乱万丈でなくっちゃな♪」

この馬鹿(ラカン)の思考は変わらないようですが。

第九話～『夜の迷宮』、救出～（前書き）

アンケート実施中です。
ユキの麻帆良での立場は…
１　教師
２　女子寮管理人
３　喫茶店などの店主
以上の３つから選んで下さい。

第九話～『夜の迷宮』、救出～

ＳＩＤＥユキ

どうも、泉野雪です。

『紅き翼』が反逆者となって数日、ガトウ達と私の調査によって、アリカ王女とヘラス帝国のテオドラ皇女が『夜の迷宮』に閉じ込められていることが分かりました。

今は救助に向かうために作戦を考えているところです。

「そもそも雪の能力があれば容易く出来るんじゃ無いのか？」

たしかに詠春の言うことは分かります。ですが、

「無理です。」

「何故だ？」

「私の能力は移動に使う場合、座標の計算がいるんです。行ったことが無い場所である上に遺跡の中となると…」

「座標の計算、ですか？」

「ええ。あの能力の移動はほとんど転移魔法と変わりません。魔力が不必要で詠唱も要りませんが。というか、そもそも二人がどこにいるのかが分かりませんし…」

「ふぅむ…脱出には使えるのか？」

「ええ。それは可能です。」

「とすると、ナギとあなたで二人の救助、私たちは外からの敵を中に入れないようにする。こんなところでしょうか？」

「それが最適解でしょう。では、明日に備えましょうか。」

作戦当日です。今は『夜の迷宮』が見える位置で、結界を張って相手方に見えないようにしています。

「相変わらずお主の結界は反則じゃの…」

「『見える』と『見えない』、その他もろもろの境界を弄って作ってますから。」

「入り口の見張りは２人ですか…どうしますか？」

「出来れば私たちの相手があの２人と内部にいる奴になるようにして欲しいですね…無駄な体力は使いたくありませんし。」

「とすると…私たちが別の場所から攻撃を仕掛けるのが良いでしょうね。出来るだけ派手にやればそちらに集まるでしょう。」

と、ゼクトが転移の魔法陣を書いてますね。

「これで完成じゃ。今とは反対の位置、高度１００メートルの場所

じゃの。」

私とナギ以外の四人が魔法陣に乗ります。

「では、派手にやって下さいよ？」

「おう！まかせときな！」

「では…転移」

四人の姿が魔法陣と共に消えました。

ズ…ズン……

直後、ここからでも肉眼で見えるほどの巨大な剣が出現しました。

「うっひゃー！派手だな！」

「ラカンの『千の顔を持つ英雄』、斬艦剣ですね。では、こちらも行きますよナギ」

「おうよ！」

結界を解除。瞬間見張りの二人が気づきました。

「チッ！向こうは囮だったか！」

飛んできたのは魔法の射手。ですがこの程度無問題です。

「『雷の投擲』！」

「咸卦法…居合い拳！」

ナギの『雷の投擲』が一人の心臓に突き刺さり、私の居合い拳がもう一人の首を折りました。

二人の息が無いのを横目で確認しつつ、中に突入です。

突入して早一時間、っていうかここ広すぎです！

「侵入者だ！」

「食い止め…」

パスッ

言い終わる前に刀で首を落としました。

「ひでえなお前…」

「聞く必要の無いことは聞きません。」

女王達の場所はここの中心部、もとい最深部だそうです。っていうかそう叫びながら襲いかかってきた馬鹿がいましたから。

「せめて苦しまないようにしてあげてるんですよっ……斬岩剣！」

ガラガラと音を立てながら壁が崩れますが、

「また外れ…いい加減にして欲しいですね…」

「そうだな…オラァ！」
ドゴォン！
ナギが走り、魔力で強化した拳で壁を殴りました。煙が晴れていきます。人影…！
「来たぜ、姫さん。」
「遅いぞ、我が騎士よ。」
「はぁ…ようやく見つかりました。テオドラ皇女は？」
「ゲホッゲホッ…妾はここじゃ！」
半ば瓦礫に埋もれるようになっているテオドラ皇女発見。
手をつかんで引っ張り出します。
「お主らは『紅き翼』かの？」
「ええ。私は泉野雪です。」
「なんと！お主が『属性を統べる者』か！」
「ええ。そうですが今はとりあえず脱出しますよ。」
そう言ってスキマを地上に開く。
「「な、なんじゃこれは！？」」

あ、初めてみればこうなりますよね…なんたって目玉だらけですもの。

「ナギ、アリカ王女とテオドラ皇女を連れて飛び込んで下さい。外に繋がってます。」

「ユキはどーすんだ？」

「私は外にいる詠春達に伝えます。振動も聞こえないですし、終わってるでしょう。」

「そうか。じゃあ先に行ってるぜ！」

そのままナギは二人を連れて飛び込みました。テオドラ皇女が「イヤじゃ～！」って言ってましたけど大丈夫でしょう。

私はスキマを別に開いて、その中に入ります。

スキマの中で状況確認…あれ？敵兵の増軍？仕方ありませんか。

「おわ！ユキ！」

「ラカン？とりあえず食い止めて。派手なので決めるから。」

呪文詠唱開始です。

「”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”！」

「イカン！離れるぞ！」

「『裁きの竜巻』！」

横向きに巨大な竜巻を打ち出すこの魔法。下手に属性魔法を打てばそのまま飲み込んで威力を上げ、そうでなくても大量の真空刃が飛んでいく、風属性の広域殲滅魔法です。

「ふぅ…」

「やりすぎじゃ。」

ゼクトに文句を言われましたが、適当に流しました。

その後はナギ達と合流、私たちは秘密基地に向かいました。

第九話～『夜の迷宮』、救出～（後書き）

オリジナル魔法
『裁きの竜巻』
詠唱
”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”『裁きの竜巻』

風属性の広域殲滅魔法。
横向きの巨大な竜巻を打ち出す。弱い属性魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。
竜巻の内部は大量の真空刃が飛び交っているため、当たった物はあっという間にズタズタにされ、塵になる。
真空刃によって切れない物はほとんど存在しない。ダイヤモンドでも真っ二つにしてしまう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5019y/

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

2011年11月22日02時51分発行